

# 市民たちがつなぐ原爆の記憶

## 広島市と周辺地域における事例を手掛かりに

徳久美生子

### はじめに

アメリカによる原爆投下から78年を迎えようとしている現在でもなお、8月6日（ハチロク）は広島市民たちにとって特別な日である。式典が行われる広島平和記念公園周辺は、（休日であれば）通勤時間帯に車両通行止めになる。8時15分にはサイレンが鳴り人々は黙祷する。寺院が連なる寺町周辺に、墓参客が行き交う。（近年参加人数は減少しているが）中心部をデモ隊が（警察官たちを伴いながら）練り歩く。

もちろん特別な日であることの意味は、それぞれの立場によって異なる。街の風景だけが特別な人たちもいるが、原爆被爆者や遺族たちにとっては、今も残る深い哀しみや傷を想起させられる日である。また広島市や平和団体にとっては反核・平和をアピールする大事な機会である。

他方で時間の経過は、8月6日の意味（あるいは意義）それ自体を変容させている。被爆によって深い傷を負った人々は亡くなっていき、あるいは外出が難しくなっている。広島市などの公共機関や平和団体のイベントのあり方も変わってきた。広島市内の公立学校の登校や平和学習のあり方が一旦見直されるなど、時間の経過とともに原爆忌をめぐる社会状況は変化しつつある。変化の中で平和に向けた取り組みは多様に展開されている。だが、平和行事が変容しても、8.6は慰霊の意味を喪失したとは言えない。

本稿では、はじめに広島市における平和行事の変化を概観し、変化の中でも慰霊行事が個人に対して持つ慰霊の意味は、必ずしも変容していないことを明らかにする。その上で広島市と周辺地域で行われている3つの行事を紹介し、生活圏を共有する市民たちによる取り組みには、体験者／非体験者という二項図式とは異なる、ヒロシマという場を共有する個人たちを担い手として原爆の記憶をつなぐ新たな意味があることを明らかにする。

### 1. 8月6日と記憶の変容

#### (1) 8月6日をめぐる平和行事の変化

2022年に広島市がHPで紹介した8月6日前後の平和行事は、208件であった<sup>(1)</sup>。コロナ禍の2021年（166件）よりは増加しており、オンラインが目立った2021年より対面での行事が増えた。だが被爆60周年だった2005年の345件、その前年にあたる2004年の246件（浜2005）と比べれば、全体としては減少傾向にあると言えるだろう。

平和行事には、原爆被爆者による被爆証言を含んだものが9件ある。被爆60周年の23件、さらに前年の13件と比べると減少しているが、原爆被爆者による被爆証言は今でも行われている。

他方で、展示、映画鑑賞、コンサート、フィールドワークと言ったこれまでの定番イベントに加えて、体験型イベントや若者を中心にしたメッセージの発信などの新しいイベントも行われるようになっていく。

ただし、広島市の HP に掲載されているのは、広島市に登録された行事であり、実際には他にも多くの行事が行われている。(広島市の HP にはほとんど掲載されていないが) 8月6日だけでも(中国新聞の HP にある)28件をさらに超える慰霊式や追悼式がある<sup>(2)</sup>。これらの慰霊式や追悼式といった慰霊行事の担い手は代替わりし、形式は変容しつつある。

## (2) 慰霊行事の変容

2022年に長崎の被爆者団体の1つが解散するなど、高齢化を理由に地方の被爆者団体は年々消滅している。広島市の慰霊行事もそれを受け継ぐ団体や学校がなくなれば、ほとんどがその時点で終了となる。慰霊行事を受け継ぐ団体や学校も実際の担い手は、原爆を生き延びた原爆被爆者たちから、被爆者団体の関係者、官公庁や会社の職員、学校の在校生、そしてそれぞれの OB 組織の構成員へと変わっている。代替わりができなかった行事は、消えていった。

2012年から8月6日に各所で行われる行事を観察してきたが、新たなイベントが創られていくなか、慰霊行事では、遺族、友人、同級生といった死者たちと直接的な関わりを持っていた人々と出会う機会が年々減っていった。

2013年から2018年まで、8月6日は、当時女学校1年生だった最愛の妹さんを原爆で亡くした原爆被爆者の細川浩史さんと、妹さんが通っていた女学校の慰霊式に参加していた。だがコロナ禍の直前から、妹さんの同級生たちも亡くなったり、施設に入居し、一緒に校歌を歌った後、目に涙を一杯ためた彼女たちと手を取り合い、挨拶を交わすことは叶わなくなった。体調を崩し2020年に施設に入所した細川さんの姿も今はない。だが慰霊式の参加者が非体験者中心になったことが、慰霊の意味それ自体を変えてしまったとは必ずしも言えない。

文字通りの意味で言えば、慰霊とは、死者の霊を慰める行為であり、儀式であるが、竹西寛子は「鎮魂とは所詮死を経験できない生者の、不安と祈りに発した知恵に過ぎない。自分自身の魂鎮めなのだ」(竹西 2002: 94) と言う。死者たちを慰霊することで自身の魂を鎮めようとしていた竹西の世代は参加できなくなったが、慰霊が生者にとっての魂鎮めであることに変わりはない。

現在も慰霊行事の後、多くの縁者たちは、慰霊碑に刻まれた死者たちの名前を手でなぞる。同様の光景は、沖縄の慰霊の日に「平和の礎」の前でも見られる。慰霊碑は死者たちの〈死〉を象徴するシンボルであり続けており、慰霊行事に参加する理由は人それぞれ多様であるが、魂鎮めの意味が失われたとは必ずしも言えない。少なくとも、慰霊碑の名前をなぞる人々は、そこに刻まれた死者たちの記憶を想起し、自身の魂を鎮めている。当然ではあるが、人それぞれに参列者が想起している死者たちの記憶は決して同じではない。だが、その場で同じ集合的記憶を想起する集団とそうでない集団との違いはあっても、体験者と非体験者による違いであるとは必ずしも言えない。

### (3) 集合的記憶と原爆の記憶

実は、慰霊碑に刻まれた死者たちの名前から想起される死者に関する記憶は、非体験者だけでなく体験者にとっても常に同一のものであるとは限らない。

社会的記憶論の創始者である M. アルヴァックスが、「死者のイメージは、決して固定化しないのである。なぜなら、人がそのイメージを思い浮かべる視角に従って、すなわち、そのイメージに眼を向ける時に人がおかれている新しい条件に従って、ある特徴は消失し、他の特徴が浮かんでくるからである」(Halbwachs =1989: 77) というように、死者に対する体験者の記憶は、現在という時点から創り直されている。また個人の記憶も、歴史<sup>(3)</sup>を参照しながら、自分自身が所属する集団の集合的記憶を再構成し、現在という時点からその都度創り変えられている<sup>(4)</sup>。

集合的記憶とは、「社会環境に存在し、個人が集団の中にある思い出の要素として見出すことができ、示すことができる記憶」(Halbwachs =1989: 42) である。それは「特定の集団に限定され、それ自身特有の法則にしたがって発展する」(Halbwachs =1989: 46)、「過去から、その記憶の中で、今なお生きているものしか、あるいは、その記憶を保っている集団の中で生きることのできるものしか保持していない」(Halbwachs =1989: 88) ものである。つまり集合的記憶とは、特定の集団内において外部を排除して過去から保持されてきた内部性の強い記憶 (Halbwachs =1989: 98) である。しかしながら体験者が参照している集合的記憶は、共通性はあるつつも基本的には個人が所属している複数の集団ごとに異なるものであり、すべての体験者が共有してきたものではない。「おうたもんにしかわからん」と言われるような体験者だけが持つといわれる原爆の記憶は、社会・歴史的に構築されたものであり、厳密な意味ではすべての体験者が共有する集合的記憶とは言えない。原爆被爆者を単一の体験者集団とみなすこともできない。さらに言えば集合的記憶という点から見たとき、多くの体験者集団が消失しつつある現在、体験者と非体験者との分断は明確でなくなっている。少なくとも幼児期に原爆を体験しながらも、家族から聞いた被爆時の記憶以外の明確な記憶がない原爆被爆者の原爆に関する集合的記憶と、父母の被爆体験を聞いて育った非体験者の集合的記憶に、かつて体験者と非体験者との間にあった違いは見出せない。

私たちが生きる「社会」にはアメリカによる原爆投下という歴史があり、原爆被爆者、被爆2世、地域社会、被差別部落の人々、家族など集団ごとに異なる集合的記憶があり、それらを素材に個人の視点から創り直される個人的記憶がある。原爆の記憶とは、それらの総称であり、その都度創り直されていく。

したがって、原爆の記憶の継承の課題とは、体験者と非体験者の分断をどう埋めるかでは必ずしもない。体験者と非体験者という二項対立図式を乗り越え、どちらも媒介者であるという視点から戦争の記憶の継承を考える必要性も提言されている (根本 2022)。伝える・伝えられるという関係を見直し、それぞれに多様な集合的記憶を構築していく取り組みが必要とされている。だが「公的領域や私的領域もそれぞれが一つのまとまった領域を形成することはない」(片桐 2003: 197) 現代社会にあっては、「生きた集合的記憶は衰退」(片桐 2003: 190) せざるを得ない。個人の自己同一性と関わるような集合的記憶の構築が困難な現在、原爆の記憶をつなぐ可能性はどこにあるのだろうか。そこで広島に暮らし、地域集団の一員としてヒロシマという場を共有している広島市と周辺地

域の市民たちが行う3つの行事を紹介し、原爆の記憶をつなぐ新たな取り組みの可能性を検討する。

## 2. 原爆の記憶をつなぐ市民たちの取り組み

### (1) A 神宮の慰霊齋業

8月6日の夕刻、広島市内にあるA神宮では、慰霊の齋業が行われる。参列するのは近隣の氏子たちである。神職が慰霊の祝詞をあげた後、献灯に火が灯され、伝統芸能が奉納される。1時間弱で儀式が終わると、供物が参列者に配られる。広島市のHPに記載はなく、参列者も決して多くない。

A神宮があるA地域は、原爆によって多くの命が失われた。熱線による火傷に加えて、爆風による家屋の倒壊とその後の火災が被害を大きくした。A神宮の前神職も、家族を亡くしている。献灯の中には、慰霊、平和といった文字とともに、亡くなった人々の名前が書かれたものもある。1990年代には、氏子たちによって境内に慰霊のモニュメントが作られてもいる。

だが宗教儀式が始められたのは、2010年代であり、行事としては比較的新しい。行事を行う現在の神職も地元出身者ではない。参加者の中には原爆被爆者もいるが、他の参加者との区別はない。非体験者を担い手としてはじめられ、継続されている行事なのである。

非体験者を主体として行われている神事ではあるが、配布されているチラシに「広島にとって8月6日は特別な日」と記載されているように、自分たちが住む場所に原爆忌という特別な時間があるという共通理解はある。しかしながらこの場所に結びついた特別な時間には、その場にあるはずの原爆に関する地域の集会的記憶が欠落している。火が回る中、助けられずに亡くなった死者たちの遺族と、助けずに逃げた人とその家族が今も生活圏を共有していることが、原爆の記憶を語ることを難しくさせる一因となってもいる。かつては、周辺の被差別部落に対する差別もあった。地域が抱えた原爆の記憶、そして負の歴史を創り直し、そこに新たな集会的記憶を構築することは難しい。だが地域が抱えた原爆の記憶や負の歴史は、個人がそれを自己同一性のレベルで捉えるには、あまりに重い。忘却は、救いでもある。慰霊齋業は、死者たちの魂鎮めであるだけでなく、忘却を許し、地域住民の健康、多幸、益々の発展を共に祈念する役割を果たしている。地域に住む人々の自己同一性に関与するような集会的記憶の構築とは逆の方向であるが、魂の平安を願う人々がいる限り、継続されていく可能性がある地域行事ではある。

### (2) 己斐小学校慰霊祭とその変容

#### ① 己斐小学校慰霊祭

死者たちを慰霊し、場が抱えた記憶を語り継ぐことを目的に続けられてきた行事もある。広島市西区の己斐小学校で行われてきた「ピースメモリアルセレモニー」(己斐小慰霊祭)、そしてそれを引き継いだ「己斐小慰霊碑慰霊と平和の祈り」である。

爆心地から2キロ離れた小高い場所にある己斐小学校には、アメリカによる原爆投下直後から多くの被災者が逃げてきた。そして命を落とした約2300人が引取り手のないまま校庭で茶毘にふされた。原爆から1年後に校庭で作っていた芋を掘り出したところ、「髑髏が出てきて、誰も食べら



れなくなった」と言う生々しい証言もある。

己斐小学校慰霊祭は、学校の平和学習をきっかけに2000年から始まった。自分たちが利用している運動場が原爆で亡くなった人たちの焼かれた場所であることを知った6年生が、自分たちも何かしたいと考え、全校生徒に呼びかけてスタートしたと言う。

慰霊祭の目的は、「戦争での原爆投下で被爆をして、己斐小学校に避難してきて亡くなられた方々を慰霊する（慰霊）、そして被爆後の己斐小学校での出来事を語り継ぎ（責任）、平和の大切さと命の尊さを親子・地域の皆さんと学ぶこと（自覚）」<sup>5)</sup>であった。慰霊祭の主催をPTAが担い、生徒を主体とした平和学習のひとつとなっていった。プログラムには、被爆証言もあった。当初は日没後、人々を焼くための穴が掘られた場所にキャンドルを灯し、生徒が合唱や平和アピールを行ってきた。その後行事の話を伝え聞いた己斐出身の原爆被爆者の女性が行事に感銘を受け、広島市や地元の有力者に働きかけ、世話人会を作って活動し、2010年に校庭に慰霊碑が建立された。慰霊碑の建立以降、行事は慰霊碑の前にテントを張って行われるようになった。

## ② 己斐小学校慰霊祭の変容

慰霊祭は、コロナ禍により存続の危機に直面した。PTAの主催に学校が協力する形式での開催は困難になった。だが慰霊祭を始めた当初のメンバーが、「己斐小学校の慰霊祭を継承するグループ」を結成し、慰霊碑の前でLEDキャンドルを灯す慰霊行事を継続させた。行事は継続したが、形式は大幅に変わった。平和学習ではなくなったこともあり、生徒の参加は少ない。コロナ禍後の2022年は、慰霊碑の前でLEDのキャンドルを灯し、参加者がそれぞれ語り合うだけであった。原爆被爆者も参加しているが、被爆証言を語ることなく歓談していた。

だが、被爆証言や生徒のアピールがなくなったことで、伝える・伝えられるという関係性が崩れ、体験者／非体験者が同じ場に立ちそれぞれがその場に埋め込まれた原爆の記憶を想起する。行事の目的には平和を作り出すことの自覚が加えられているが、参加者個人が、その場が保持してきた原爆の記憶を自分の個人的記憶に印づけ、活動していくことが促されており、集団行動への勧誘もない。

個人的記憶に印づけられた原爆の記憶は、個人によって多様である。また生徒の不在により、その場に埋め込まれた集合的記憶を受け継ぐ主体が曖昧になってもいる。だが形式を変えた慰霊祭は、知識や情報を交換しあう、歴史や地域住民が共有してきた過去の集合的記憶を見直す機会ではある。慰霊祭の長年にわたる参加者でもある川本隆史氏は、「固定観念や神話へと凝り固まって人々を縛る傾向」がある記憶を、「一つ一ついいいにほぐし、当事者の記憶に歪みや欠落がないかどうかを見定め、歪みが見つければそれを改めようとする」（川本 2018: 35）記憶のケアを提唱してきた。共通の集合的記憶の構築にはつながらないが、原爆の記憶を捉え直す記憶のケアの場とはなっていないのではないか。

## (3) 被爆イチョウ2世を守る取り組み

### ① 広島市郊外B地域の地域活動

広島市郊外のB地域は、約40年前から開発が進められた住宅地である。高齢化が進行しているが、空き家を取り壊された場所が複数の住宅となり居住地が増えたことで、高齢世帯と子育て世帯が共

存している。この世代の分断が、自治会運営を難しくしている。開発当初は、全員入会が原則であった自治会にも近年は入らない世帯が増えている。担い手となる中堅世代が不在であることも一因となり、役員選びも困難な状態となっている。

この地域には、自治会の下部組織として、老人会、こども会、お祭り会、防災会があるが、この地域で最も活発に活動しているのは、老人会である。独自に会費を徴取し、市からの予算も活用し、月2回の活動、体操、レクリエーションなどを企画、実行している。老人会から子ども会に提案し、夏休みの水遊び、ハロウィン、クリスマス会などを共催してきている。

## ② 被爆2世イチョウの植樹

2020年に、この地域に住むある女性から「これまで自宅で育ててきた被爆イチョウの2世を、地域の公園に移植したい」との相談が老人会に持ち込まれた。被爆樹木の種から育てられた苗は、原爆の惨禍を伝えるシンボルとして平和市長会議に参加している国内の市町村をはじめ海外にも配布されている。広島市内のNPOでボランティアをしていた女性は、そのNPOを通して被爆2世イチョウの苗木を譲り受け、自宅で育ててきた。だが自身が高齢になったこともあり、地元の公園に移植し、公園で遊ぶ子どもたちに原爆の記憶をつなぎたいと願い、老人会に相談したのである。

相談を受けた当時の老人会長（毛利氏：仮名）と老人会のメンバーが市に働きかけ、2021年1月に公園への植樹が許可された。植樹の前に老人会は、自治会と相談し、自治会メンバーに植樹の目的や意義を回覧で伝えた。反対する人がいることに配慮し、同意を得る必要があると考えたからだ。そして2021年2月に植樹が行われた。

女性から相談を受けたとき、毛利氏は、被爆2世のイチョウが地域のシンボルにもなるのではないかと考えたという。地域のつながりが薄くなる中、何かシンボルになるものがあればいいと思っていた。平和は皆が賛同できる不滅のテーマであり、大切に育てていけば、子ども会とのつながりにもなると考えたという。子ども会と被爆2世イチョウとのつながりを作る取り組みとして、老人会は、原爆忌前後の日程での共催行事開催を子ども会に提案した。

## ③ 被爆2世イチョウを守る取り組み

植樹後の2021年8月に、子どもたちが原爆について学んだ上で被爆2世イチョウに水をやる行事が開催された。準備、当日の設営、進行といった作業は、子ども会の父兄たちが行った。子どもたちは、公園内の集会所で原爆被爆者の証言を聞き、老人会による原爆に関する紙芝居を見てから、全員でイチョウに水をあげた。老人会とこども会の予算で、参加者には飲み物、こどもたちには飲み物とお菓子が配られた。

翌2022年8月にも同じ行事が計画された。前回子どもたちに被爆証言が伝わりにくかったこともあり、証言はなく、老人会による紙芝居だけが行われた。また水やりは高学年の代表者に限られ、水やりの後は、ゲーム大会となった。準備や当日の設営や進行は、前回と同じようにこども会の父兄たちが担い、ゲームは老人会が手伝った。老人会は、夏祭りのイベントとして今後も子ども会にこの行事を提案していく意向だ。

## ④ 前老人会長の思い

市に植樹を働きかけた当時の老人会長毛利氏は、広島出身ではない。転勤先であった広島で結婚

し、そのまま住み続けることになった。広島に来るまでは、平和や戦争ということはあまり考えなかったという。広島にきて、子どもが生まれて、色々あって身近に感じるようになった。広島という環境があるところに住まわせてもらったが、他の地域に転勤していたら、何も考えずに一生無頓着でいたと思うと話してくれた。

毛利氏の話からは、広島という場所に住むことが、戦争や原爆の問題を身近に感じさせるとわかる。日常に接する人々が、何人かの親族や知人を原爆で亡くしている。被爆はしていなくても、原爆によって人生が変わってしまった人も多い。毛利氏の結婚を後押ししてくれた親族も、原爆被爆者だった。

毛利氏は、広島という環境に暮らしてきて、原爆を生き延びた原爆被爆者の命が、次世代さらにその先の世代へとつながっていること、すなわち命のつながりがあることに意味を見出している。そして被爆2世イチョウは、その命のつながりを象徴していると考えている。毛利氏は、被爆2世イチョウに込めた思いを以下のように語ってくれた。

木の中にいるとすね癒されるとよくいうじゃないですか。それは理屈じゃなくて、やっぱり木と自分の命がすね共鳴しているんじゃないかと思うんですね。だから、木と会話してるんじゃないかと思うんですね。だからこそ、木ごとそれに癒されていくというそういう不思議な。特にこのイチョウの木っていうのは、どういう命を根本に持っているかと言ったら、やっぱり原爆で痛めつけられた、ないしはその段階で亡くなっていたかもしれない、この命が。でもこの命が誰かにそういったことを知ってもらいたいという心というのかそういうのがあって結局生き延びた。ここに生きている。今度はそれをそれだけの生命力がある経験をした生命力のある木を触ったりそこに行くだけで今度はその命がこっちに移ってくる、そこに行った人に。理屈じゃなく入ってくる自然に。だからそれを要するに木と共鳴する。人間も植物もやっぱり合致していくというのかな。一体のものおんなじ命という一体のものだからそういう強い使命を持った、命を持った人にはやっぱりそう同化される。だから必要なんですね。こういう木もそれだけの意味があって生きているわけだから。やっぱりイチョウの木はイチョウの木としての使命を持って生きているわけです。だからその使命を、イチョウの木もどっかで発揮しなくちゃいけないじゃないですか。やっぱりこの場で大きくなって、きた人とかそう言った人たちに対してそう言った命を伝えていく。伝わっていく。自然に伝わってくるんですね。だから絶対に必要なんですね。

被爆2世樹木は、世界中に植樹されているが、その命のつながりは、実際に原爆被爆者からの命につながる人々、あるいはその人々と日常を共にする人々の集団だからこそ実感できるのかもしれない。もちろんB地域に暮らしているからといって、誰もが被爆2世イチョウに目を向けるわけではない。他の地域以上に人々が平和や戦争について考えているとも言えない。けれども被爆2世イチョウは、公園に枝を広げ、(例え形式的ではあっても)子どもたちから水をもらい、自分たちの住む広島が原爆被爆者たちからの命が繋がった場所であることを示し続けるだろう。

### 3. 原爆の記憶をつなぐということ

#### (1) 3つ行事にみる目的の違いと共通点

原爆忌前後に、広島市とその周辺地域において、市民たちを中心に行われている3つの行事を紹介した。3つの行事は、それぞれ目的を異にしている。A 神宮の慰霊齋業の目的は、死者たちの慰霊と参加者の平穏であり、己斐小学校の慰霊祭は、死者たちの慰霊と平和の希求を目的としている。そしてB地区の被爆2世イチョウを守る取り組みでは、被爆2世イチョウというシンボルを共有することで、平和というテーマのもとに地域の共同性を構築することが目指されていた。

だが3つの行事には共通点もある。第1に主な担い手となってきたのは非体験者たちであること、第2に、(己斐小学校の場合はコロナ禍以降であるが)体験者もまた行事の参加者のひとりと思なされるようになり、伝える／伝えられるという関係が解消されていること、第3に、平和が強くアピールされていないこと、第4に、アピール力は弱い、参加者が原爆の記憶を自身の個人的記憶に位置付けて想起する機会となっていること、第5に地域内を中心に行われているが、部外者も参加可能なことである。

以上5つの共通点から、3つの行事が次世代への原爆に関する集合的記憶の構築には必ずしもつながっていないとわかる。A 神宮の周辺地域では、原爆に関する集合的記憶を新たに構造化する上で不可欠な、過去の集合的記憶の忘却が志向されている。己斐小学校の慰霊祭からは、その場で日常を過ごす生徒という新たな集合的記憶の担い手集団が集団としては参加できなくなっている。B地域には、原爆に関する地域の過去の集合的記憶そのものがない。しかしながら3つの行事は、市民たちの実践には、原爆の記憶をつなぐ上では集合的記憶の再構築が必ずしも必要でないことを示唆している。

#### (2) 原爆の記憶と個人的実践

原爆の記憶をつなぐ取り組みが集合的記憶の再構築を必要としないのは、原爆の記憶が(歴史、集合的記憶が個人的記憶に位置づけられるため)個人それぞれにとって多様なものであり、ひとつの集合的記憶やそこから派生した一般的な物語やスローガンには回収されないからである。A 神宮の慰霊齋業、己斐小学校の慰霊祭、そして被爆2世イチョウを守る会、いずれにおいても参加者に想起が促されていたのは、場の記憶やシンボルを通したそれぞれの個人的記憶の再構築であった。したがってこれらの行事にあって原爆の記憶をつなぐということは、場所に埋め込まれた歴史、過去の集合的記憶あるいは樹木に刻まれた原爆の物語を個人的記憶に取り込む個人による実践を意味する。共通の集合的記憶の構築でも、同じ物語の共有でもない。個人たちによる実践なのである。そこに何らかの共同性があるとしたら、原爆を生き延びた人々が命をつないだヒロシマという場に生きているという事実だけである。だがそれは、毛利氏が言うように、ヒロシマに暮らす人々にとって決して無頓着ではられない事実ではないだろうか<sup>(6)</sup>。

3つの行事には、ヒロシマという場を共有する個人を担い手とし、体験者／非体験者という枠組を超えて原爆の記憶をつなぐ意味があると考えられる。



尚、ヒロシマという場の共有には命をつなぐと言う論点もあるが、被爆体験の継承を考える今後の論考で検討していきたい。

## 注

- (1) 令和4年度平和関連行事一覧表  
(2023/3/10 取得, <https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/13154.html>)
- (2) 中国新聞 2022年8月6日各地で追悼8・6  
(2023/3/10 取得, <https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=122364&query=慰霊行事>)  
広島市のHPに掲載されている慰霊式・追悼式は、8月5日行われる死没公務員の追悼式と死没した水道局職員の慰霊式、そして8月6日に郊外の湯来地域で行われる慰霊式の3件だけである。  
慰霊式や追悼式が平和行事として登録されていないのは、主催者による届出がされなかったからだと考えられる。広島市の平和行事一覧に掲載されている関連行事は、主催する団体が届出したものであり、届出がされなければ掲載されない。届出は、その行事が平和とつながりがあるかどうかという判断基準に従ってなされる。従って主催者が慰霊の行事を平和行事ではないと判断すれば、届出はされないことになる。
- (3) アルヴァックス自身が、「歴史的記憶という表現はあまりうまく作られたものではない」(Halbwachs=1989: 86)と述べていることから、本稿では、アルヴァックスの著書『集合的記憶』においてより多く使用されている歴史という表現を用いる。
- (4) 被爆体験が、ある時点での記憶が記録されたものであるという指摘(直野 2015)も、記憶が創りなおされることを前提としている。
- (5) 2015年己斐小学校慰霊祭チラシより引用
- (6) 2011年から広島で調査をしているが、個人宅に宿泊し、近隣の方々とおつきあいでいることもあり、広島に生まれ育った人々が何らかの形で原爆の影響を受けていることを実感している。

## 参考文献

- 浜日出夫, 2005, 「集中するヒロシマ・分散するヒロシマ: ヒロシマの継承の可能性」日仏社会学会『日仏社会学会年報第15号』日仏社会学会.
- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学: 自己論からの展開』世界思想社.
- 川本隆史, 2018, 「記憶のケアを織り上げる: 〈脱集計化〉を縦糸、〈脱中心化〉を横糸に」東琢磨・川本隆史・仙波希望(編)『忘却の記憶 広島』月曜社.
- M.Halbwachs, 1950=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.
- 直野晶子, 2015, 『原爆体験と戦後日本: 記憶の形成と継承』岩波書店.
- 根本雅也, 2022, 「〈戦争体験継承〉の未来を探る」戦争社会学研究会『戦争社会学研究6』、みずき書林.
- 竹西寛子, 2002, 「広島が言わせる言葉」『竹西寛子随想集1』岩波書店.

